

---

# 戦国乱世～あやかし物語～

夢雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦国乱世～あやかし物語～

### 【著者名】

夢雪

N6630M

### 【あらすじ】

戦で自分の国と家族を殺された葵・・・つらくなつた時にいつも来た

場所で不思議な文を見る。

そこにはなぜか帝に会えと書かれていた。

そこで出会つた「琥珀」「朱牙」と、ともに京へとめざし旅に出る。

旅に出た先々でいろんな妖怪や武将達と戦つたり、助けたり・・・

そんなお話

## 始まり（前書き）

初めての小説ですが  
よろしくお願いします！！

## 始まり

設定  
紅原 葵

年齢； 13歳

身長； 163?

髪型； 黒髪をポニー・テール  
目の色； 黒

性格； 静か あまり笑わない

武器； 刀・花鳥風月 仕込み刀・番傘の柄

属性； 風 雪

能力； 空気操ることができ。 周りを凍らせる。

その他； 右腕にあざがある。 暴走すると髪が銀髪になる、目が少し赤くなる。

二つ名； 風花の葵

## 第1章

周りに転がる死体、周りを染める血、血、血、あたしの大嫌いな臭い、光景あたしの下には、大好きな兄上、姉上真っ赤な血で染められて、いた。何故…何でこんなことに……

5時間前

いつも通りの日だったはず…  
いつも静かだけど今日は、違った。

ざわざわ

「姉上、どうしたのですか？」  
「あ、葵！今すぐ支度をして！！」  
「え？何故で…「戦が始まるわ！」  
「戦が…ならあたしも戦います！」  
「駄目、あなたは、逃げるの名の大名がこの国を滅ぼそうとしてる。」

「滅ばそうと…何故！？」

「天下のためよ…お願い葵あなたは、生きて」  
「いやです！！あたしも戦います。」

「今、光夜が戦いの準備をしているわ葵あなたは、安全な場所にい

なさい…」

「秋、葵、敵がもう来た。早く葵をここから逃がせ」「分かっているわ葵早く女中と行きなさい。」

「いや…」

光夜が葵の頭を優しく撫でた。

「何、ちつと戦うだけだ。すぐ終わる。だから今は、我慢しない

「そうよ光夜の言うとおりよ。だからね…」

「分かりました。でも絶対戻ってきてください」

光夜と秋は、優しく笑った。

「おう！」

「ええ」

「約束」

バタバタ

「殿！敵が進軍してきております！！」

「分かつた。行け葵。秋、行くぞ」

「ええ」

2人は、武器を持ち戦場に向かった。

「葵様もお早く逃げてください。」

「うん」

(絶対約束だから)

待っています。

進軍するは、武田、上杉、伊達、

武田

「あれが天下に近き物か…佐助敵の動きはどひづじや？」

「敵は、動く気がないみたいですね。」

「うむ、幸村らああ！準備は、よいかあああ！」

「親館様あああ！準備できております！」

「ここに各國の大名があるやつらより早く紅原を討ち取るのだ…！」

「承知しました！！親館様あああ…！」

「幸村あああ…！」

親館様あああ

幸村あああ…！」

親館様あああ…！」

以下略

「はあ…やれやれ…」

上杉

「そろそろですね…かすが敵は、どうしていますか？」

「は、はい今の所動く気配は、あ、ありません」

上杉謙信は、かすがの頬に手をそえた。

「わたくしのうつくしいつるぎかんばってください」

「ああ、謙信様ああ…！」

伊達

「HA！天下は、俺がもうつい小十郎準備は、いいか？」

「は、準備はできております。」

「OKさあ楽しいPartyの始まりだ！」

秋は、戦場をただ見ていた。

「そろそろか…秋！準備は、いいな？」

「ええ、これが最後の戦ね」

「しゃあないだろそれが運命だ」

「約束守れなかつたね」

「ああ…」

「殿！もう守りきりません！」

「分かつていい。皆の物敵につつこめーー最後の戦だーー！」

『おおー』

紅原軍全員が敵に向かい攻撃を始めた。

「秋またな」

「ええ、また」

秋、光夜は、戦場に消えた。

葵は、近くの森に隠れていた。武器を抱え座っていた。  
絶対出るなど、言われてたからずつと座っていた。  
近くが騒がしくなった。

「幸村よ見事であった。」

「はい、この幸村、紅原を討ち取りましたーー！」

(え？兄上達が殺され、た…?)

しばらくすると、静かになつた。

(いかなきや)

走った、ただ夢中で光夜たちがいる所まで

ただ一つの願いをこめて…

お願い

死なないで！

葵は、戦場となつた自分の国を見た。

「ひどい…何で…どうして…」

下を見ると大好きな兄上、姉上真っ赤な血で染められていた。

「兄上、姉上起きてください…」

秋と光夜は、ただ目を閉じたまま死んでいた。

「いやだ！一人にしないで…嘘つき…一起きて起きてよ…みんな…いやだああああああああ…！」

葵は、一人戦場で叫んだ。

葵は、ゆっくりと立ち上がり森の方に歩いていった。伸びていたついた場所は、大きな洞窟だった。

(つらくなつたときよくここに来た。)

少し進むと、桜の木がありその根っこがあちらりあちらに伸びていた。

「何」れ…?』

桜の木の下に変な文字と凹みがあった。

天の帝 京の都 天下人 に來たり  
とこひどこひ読めなくなつていた。

『帝つてあの帝に会うの・・・?』

『ああ、そうだ葵』

どこからか声が聞こえた。

『誰!…!』

武器を構え葵は、叫んだ。

『落ち着いてください葵様私たちは、敵ではございません。』

『俺のこと忘れたのかよ』

『…もしかして琥珀に朱牙!』

『はい、葵様』

葵が持っていた刀と首に下げていた勾玉が光り、刀が赤い髪を簪で  
まとめた美しい女に変わり

勾玉が白い髪が肩ぐらいの美しい男に変わった。

『お久しぶりです。葵様、琥珀でござります。』

『久しいな葵覚えてるか?朱牙だ』

『2人とも…み、みんなが』

『知つて居る。俺たちは、全部知つて居る。』

「あたし…どうすれば…」

葵の目から涙が溢れていく

「葵様、あなたには、やならければならないことがあります。」

「帝に会えお前がお前であるため」

「訳わからんない、帝に会つ?」

「以前のことつらいでしようがこれは、秋様、光夜様の望みでもあります。」

「2人の?」

「そうだあいつらが俺たちに頼んで来やがった。おめえを守つてくれと、な」

「……分かった。」

葵の目には、もう涙など無かつた。

「それでは、葵様私たち琥珀

「朱牙」

「「あなたにもう一度忠誠を」」

葵の、前で片膝をついて頭を下げる。

(あたしは、もつ泣かない。なにがあるか分かんないけど、帝に…)

## 女郎蜘蛛

あれから3ヶ月

「殺せ！」

「大将の首を討ち取るのだ！..」

「こには、戦がおこなわれている。

「助けてええ！…が！？」

逃げ遅れた。農民などが戦に巻き込まれていった。兵士達は、かまわず農民をも殺していった。

「この邪魔な農民め！」

1人の兵士が農民を斬ろうとしたとき

「やめなよ、こんなところで戦なんて」

斬ろうとしていた兵士の刀が吹っ飛んだ。

「なつ！？貴様は、誰だ！」

「別に名乗るほどでもないよ」

それは、黒い髪を一つに束ね番傘をさした娘であった。

「もしや貴様は、風花の葵…！」  
「あーそつとも言われているな」

周りの兵士達は、葵に刀を向けて襲いかかった。

「風花の葵だ！奴を殺せ！」

葵は、驚き

「ちよっとひどくね！？」

軽く後ろに避けて葵は、刀を抜いた。そして技をだした。

### 【風舞い】

急に葵から風が吹き兵士達の刀を吹っ飛ばした。  
葵は、刀を構え直し兵士を睨みつけた。

「…まだやる？」

「ひいい！」

「化け物！助けてくれええ！」

兵士達は、怯え逃げていった。  
葵は、刀を鞘に収めた。

「ふう、なんとかなったな」

「あのありがとうございました！」

「ん？ああ気にしないでいいよ。それじゃあ

お礼の言葉を軽く流しその場から去った。

『流石は、葵様誰一人殺さずに事を収めましたね』

勾玉に宿っている。琥珀は、人を殺さずに終わったことを喜んだ。

「うん、できるだけ人を殺さないで行きたいから」

『何での兵士を斬らなかつたんだよ！』

刀に宿つてゐる。朱牙は、葵があのとき兵士を斬らなかつたことに激怒した

「いや殺しはしたくないし……」

朱牙が怒つた。口に少し戸惑いながら葵は、答えた。

『甘い！そんなことで生きていけると思つなよ！』と朱牙は、葵に向かつて指を指した。

『やめなさい！朱牙あなたは、何でそつなのですか！葵様に忠誠を誓つてそのようなこと恥ずかしくないのでですか！』

朱牙の言動に腹を立てた琥珀が叫んだ。

『つむせーよ！てめえこそ毎度毎度同じこと言つてもうつの話など

聞き飽きたわ！』

『な！言わせておけばいい気になつてだいだいあなたは……』

葵は、上で行われている朱牙と琥珀の喧嘩に苛立ちを感じていた。

「お前ら……こい加減にしろ……」

苛立ちが頂点に達した葵は、2人に向かい怒った。

『……こいけど周りには、お前の声しか聞こえないから葵、お前そうとう痛いぞ』

朱牙の言葉に気がついた葵は、周りを見た。

「お母さん～あそこに1人で叫んでいる人がいるよ～」

「しつ、見では、ダメでしょ」など親子がお決まりの台詞を言った。

そこに居づらくなつた葵は、急いでその場所から去つた。

「あ～ひどい田にあつた…」

とつあえず葵は、茶屋に入り休憩をとることにした。

「団子一つください」

「は～よ～」

注文すると店のおじさんが団子を持ってきた。

「やつと休憩だ～」

「隣いじで～ざるか?..」

団子を食べてこるとそばから声が聞こえた。

「ん?いいですよ」

声が聞こえたほうを見ると赤い鎧を着た青年がいた。

「かたじけない」

葵は、隣を譲つた。

(「こつ見たことある…）

「お名前は？あたしは、葵と申します」葵が名前を聞くと

「某は、真田源次郎幸村でござる」

「…真田、源次郎幸村…」

その名前は、まぎれもなく3ヶ田前紅原家を襲つたうちの一人であった。

（おやか…）こつは、こつは、……）

「…………」

葵は、とたんに黙りつむいた。

『葵様！落ち着いてください…』

「葵殿？」

「…そうか貴様が真田幸村か…ふ、ふふふ」

「あ、葵殿？どうしたので…」

幸村が葵を呼びかけたとき

「あれ～旦那またそんなところでした。ん？その子誰？」

「佐助…」

そこに現れたのは、真田忍隊隊長 猿飛佐助であった。

「旦那がいなくなつたから探しに来たんだろ」

「む、すまない」

「で、この子誰？」

佐助は、葵の顔をのぞき込んだ。

「…あたしは、葵」

「葵ちゃんねよろしく、しかしあんたみたいな子が一人で、どうしたのかな？」

笑顔だったが佐助の目は、笑ってはいなかつた。まるで葵を探つているようだつた。

葵も笑つて言つた。

「よろしくーあたしはただの旅人ですよ」

「ふーん、ただの旅人ね…」

佐助は、目を細めて葵を睨み付けた。

「さて、あたしはそろそろ行きますね」

葵は、佐助と幸村のほうを向いて一礼した。

「葵殿もう行くのでござるのですか？」

「はい」

「じゃあねー」

佐助は、笑顔で手を振つた。

「それでは」

葵は歩きだした。

「…田那あの葵つて子と何話したの？」

「別に話してなど……つー?」

幸村が残っていたお茶を飲もうとして口をつけたと、とてもない  
冷たさに襲われた。

「旦那どうしたの?」

「茶が凍っている…」

幸村が飲もうとしたお茶は、凍っていた。それだけでは、無かつた。  
周りをよく見ると所々凍っていた。

「嘘でしょ……?」

「何故だ……?」

2人は驚きを隠せなかつた。

「「」の現象どこかで見たことがあるような気がするな…」

+

+

+

「」は、「」の町で一番宿や店が多いこと「」だ。そこを葵は、今日泊  
まる宿を田指し歩いていた。

「ふう……」（真田源次郎幸村確かにあの男は、あのときの…）

『葵様大丈夫でござりますか?』

先ほどのことを心配した琥珀が少し焦った表情で声をかけた。

「大丈夫、ただちょっとと思い出しだだけ

『そう…ですか』

少しの間沈黙ができた。

『あー……何だー』の辛氣くせえ奴はーもついいだりやつれと宿探すぞ……』

朱牙が急に大声をだし沈黙を壊した。

「やうだなーやうやと行くか！」

葵は、止まつた足を再び宿へと足を進めた。少し歩くと宿があつた。葵たちは、ここで泊まる事にした

「すいませーん」<sup>3日間泊まりたいのですが</sup>

「また妖怪が出たか…ん?お密かい<sup>3日間ね?</sup>あそこ<sup>の部屋</sup>を使つてくれ」

店の店主は、読んでいた瓦版を机に置き部屋の鍵を渡した。

「あつがとひ<sup>ぞ</sup>ります。所でさつきの妖怪つて、何ですか？」

「ああ、こ<sup>の</sup>辺で出るんだよ妖怪が」

「妖怪が?」葵は、首を傾げた。

「そつや、美少年しか狙わない女の妖怪<sup>りじこ</sup>まあ噂だからねお嬢ちゃんも気をつけなよ」

「やうですか」

葵は、店の店主に一礼した後部屋に向かつた。部屋に着いた葵は、座敷に寝こひんだ。

『なあ葵さつきの妖怪の話<sup>ひ</sup>するんだ?』

『どうするつてやるしかないだろ』葵は、ため息をついた。

『では、いつにしますか?』

『…今日執行だ』

『』了解しました『』

+

+

「よいか幸村！近頃町で妖怪が出ると皆が怯えておる幸村よ佐助と共に妖怪を倒して参れ！」

「承知いたしました！！親館様あああーー！」

「幸村ああーー！」

以下略

「あのーー旦那そろそろ行かないと…って聞いてないか」

夜中、でもただの夜では、無かった。月は、妙にほんのり赤く道を照らしていた。

「旦那 本当にいいの？ 旦那自ら囮になるなんて

「つむ！ 某がやらぬで誰がやるーー！」

佐助の質問に気合いの入った声で答える幸村。だがいつも持っている2つの槍を持って無く佐助が持っていた。

「よいな？ 佐助某が合図をしたら槍をこじりて投げてくれ

「はいはいっとでも気おつけてね」

「分かつてある…頼むぞ佐助」

幸村が真剣な目で佐助を見ると佐助は強くうなずいた。

「それじゃあ旦那がんばってよ」一言だけ言つとカラスにつかまり飛んでいった。

幸村は、噂になつてゐる宿の道を歩いた。するとどこのからか女の声がした。

「お侍様こんな遅くにどうされたのですか？」

幸村が後ろを振り向くと女が立っていた。その女は、式を挙げるときの衣装を着ており顔が人とは思えないほど青白かった。

(こやつが噂の妖怪!)

「こんな夜遅くに一人でいると危険ですよ。そう……例えば妖怪に襲われるとか」

ゾク

幸村は、悪寒がした。

「佐助!!! 槍を！」

幸村は、力一杯叫んだ。佐助がカラスに捕まり、槍を幸村に投げた。

「旦那…ほらよっと！」

幸村は、槍を受け取り女に槍を向けた。

「うおおおお……貴様の思い道理にはさせん……真田源次郎幸村、いざ参る!」

「つまそつな人の香り、お侍様私の力の源になつてくださいな」

女の背中から蜘蛛の足が生えた。女いや妖怪は、手から無数の糸を幸村と佐助に巻き付けた。

「ぐつ……」

「クソ！」

2人は、身動きができず地に倒れた。

「ああ、こんなうまい人間を食えるなんて…ふふふ…」

妖怪は、狂ったように不気味に笑つた。

「さあお侍様もう観念してくださいな

「ここまでか…親館様！」

2人が諦めたとき2人の自由を奪つていた糸が切れた

「そんな奴食つてもうまくないと思つよ

そこに現れたのは、葵だった。

「な！葵ちゃん！？」

「葵殿！…」

「やつぱりねあんたらだと思つたよ

「葵殿なぜここに！」

「仕事だからね…だから妖怪、女郎蜘蛛あんたを倒させてもらひつよ

葵は、腰に差していた刀を抜き女郎蜘蛛にむけた。

「なんで貴様！私の邪魔をする…フフ、まあいい貴様も食べばいい

こと

「フン、あたしを食べるか？」

女郎蜘蛛は、手から糸をだし葵を縛ろうとしたが葵は、刀でその糸

を斬り女郎蜘蛛へと駆けていった。

「くつ！小賢しい小娘！死になさい！」

女郎蜘蛛は、手からだした無数の糸を先が尖るように束ねた。束ねた糸は、まるで鋭い槍のようだった。

「そんな物であたしは、殺せないよ」

### 【死雪】

葵は、刀を横に素早く振った。すると刀から白い雪のような物が出来た。それは、女郎蜘蛛に飛んでゆき女郎蜘蛛の足や手に付き足や手を凍らした。

「！？体が！」

「闇に飲まれた妖よ今、光に帰れ」

葵は、そのまま刀で女郎蜘蛛の腹のあたりを突いた。刀は、女郎蜘蛛の背中を突き抜けた。

「いやまだ消えたく、ない」

女郎蜘蛛は、震えるような声で呟いた。  
葵は、静かに目を閉じた。

「大丈夫あなたは、消えないだってあなたは、まだ心があるから…」

女郎蜘蛛は、ゆっくりと消えていった。

「あなたの心は、あたしが治すから少し、待つてて」

しばらぐすると、幸村と佐助が起き上がった。佐助は、武器を構え

幸村は、じつと葵の事を見た。

しばしの沈黙を破ったのは、幸村であった。

「あ、葵殿先の化け物は、いつたい…」

葵は、刀を鞘に収め幸村たちの方を見た。

「あの人は、化け物じゃない」

「化け物じゃない？じゃあ何だって言つだよ」

口を開いたのは、佐助であった。

「あの人は、何かがあつて歪んだ心が動いた物つて言つてもあんた達には、分かんないだろ？うね」

葵は、2人を睨み付け背を向ける

「あたしの仕事は、終わつたからじゃあね」と言い宿に向かつて歩いていった。

「あの葵ちゃんは、危険だよ旦那

「う、うむ」

幸村は、顔を赤くさせていた。

「どしたの？」

「葵殿は、おなごだつたのだなーー！」

「は？」

佐助は、拍子抜けをして左手を左右に振った。

「いやいや、普通分かるでしょ！」

幸村は、体を震わせ上に向くと

「は、破廉恥でござる……」と叫んだ。

このことに驚いた佐助は、幸村を止めようとした。

「ちょつ、旦那近所迷惑でしょ！」

「破廉恥！」

「旦那、頼むから静かしてくれ！」

2人の声は、夜の道に木霊した。

+

+

宿に帰つた葵は、部屋に入り腰に差した刀を下に置いた。すでに敷いてあつた布団に寝転がつた。

「あの妖怪、人間だつた」と思い出すよつに言つた。

『ああ、確かに人間の臭いがした』

「明日、調べるか…お休み」

葵は、疲れがたまつっていたのかすぐ眠つてしまつた。

ここは、ドコ？…寒い、暗い、「…ツー」下を見たら一面血の海だ

つた。

「い、いや…助け、て」逃げたくても体中に鎖が巻き付いて動けない

「…あなたのせいだ」どこからか声が聞こえる。「してやる

」

急に血の海から人の影のような物が葵をつかんだ。「殺してやる……」葵は、血の海に落ちた。「いやああ……！」

『 様、葵様！』

「 い、琥珀……？」

葵は、肩で息をしながら布団から起き上がる。

『 うなされておりましたが……またあの夢ですか？』

「 ああ、最近あの夢ばかり見る……あれ、朱牙は？」

『 朱牙ならば朝早くあの女郎蜘蛛の事について、調べに行きましたよ』

「 珍しいな、朱牙が自分から行くなんて今日は、槍が降るな

立ち上がると寝間着からいつもの着物に着替えた。

『 槍なんて降らねえよ……』

いつの間にか朱牙が立っていた。

「 あ、お帰りどうだつた？」

『 ……軽く調べてみたが結構めんどくさい話だな』

「 朱牙の話によるとあの女郎蜘蛛は、もともとある大きな宿の一人娘でとても可愛がられていた。

その娘の名前が（凜）美しく心の優しい娘らしい。凜が18歳の時恋人ができたその恋人は、眞面目で優しい性格だった、だが本当は女性を騙し金を奪うひどい者だった。運悪く騙された凜は、金を奪われ殺された。』

「嫌な話だな…」  
顔をしかめる。

『凜つて奴は、殺される前蜘蛛を助けたらしく』  
「きれいな心を持っていたんだな」

『どうしますか？葵様』

「今日その宿に行って、成仏させる、いくぞ」

『『御意』』

+

+

「 つといづわけです」

佐助が夜に起つたことを武田信玄にはなした。

「・・・その葵と言つ者は、今どこおる?」

「妖怪が出た通りにある宿です」

「分かつた報告」苦労であった。今日の夜もつ一度幸村と一緒に妖怪が出た通り

を調べてこい、よいな

「御意」

+

++

「 じいが例の宿か・・・」

『葵様、気あつけてください。あの女郎蜘蛛は、まだ生きております。』

『つーか、葵があのとき殺さなかつたのが原因だろ』

「あの人は、ちゃんとした人間だ。そして、あの女郎蜘蛛も・・・だから、きちんと成仏させん」

「あれ、またあつたね」

++

「・・・はあ、またあんたらか・・・」

目の前に現れた真田幸村、猿飛佐助を見ると、嫌そうにため息をして。

「某達もあの女郎蜘蛛を退治するよつて仰せつかつたのだ  
「どうせ、葵ちゃんも行くと同じでしょ? だつたら一緒に退治し  
ようよ」

「つむー! そのほうが効率もいい!」

「・・・好きにすれば」

一言だけ言つと葵は、さつさと女郎蜘蛛のいる宿に入つて行つた。  
宿の中は、暗く重い雰囲気だつた。

「何で?」  
「何か息がしづらー」

幸村と佐助は、その場に倒れ込んでしまつた。  
葵が2人を見て

「朱牙、琥珀」

『はい』 『どうした?』

葵が呼ぶと琥珀、朱牙が静かに現れ

「その2人を守つておいて、人間が入るにはこの空氣は、きつい  
みたい」

『分かつた。でも氣おつけろよ今の葵じやあ、そう簡単に勝てない  
分かつてる、2人を頼んだよ』

そう言つと、葵は、さらに奥へと進んでいった。

「ああ、痛い痛い……体が焼けるように痛い……早く力を……」

奥に進むと、そこには一つの部屋がありその部屋から女の声が聞こえた。

「……か……」

葵は、刀を抜き、ふすまを開けた。

「貴様か……どうしてくれるこの体を……」

「女郎蜘蛛あんたは、もう歩けない、力も弱つて来てる……違う？」

「黙れ……貴様を食えばまた力が戻る……さあよ」セー……」

女郎蜘蛛が叫ぶと、蜘蛛たちが部屋の中に入つて来て葵の体を掛け、無数の糸を吐く

だか、葵はその糸を素早く切つて行く。

「そんなことして、恩返しになるの？」

「何故そのことを……？」

一瞬、女郎蜘蛛の攻撃がゆるんだ隙に葵が周りの蜘蛛たちを一気に凍らせる。

### 【死雪】

「私は、こんなところで消えるわけには、いかない……凜様を殺したあの男を……！」

「邪魔するな……」

先ほどとは、桁違いの妖氣を出し葵に攻撃を仕掛ける。

「くつ……あんたその男を殺して、何になる?・凜さんは、どう思つ  
の?」

攻撃を受けながらも必死に問いかける。

「凜さんは、優しい心を持つた人、そつでしょ?・凜さん」  
「う、うぐ・・・あああ・・・」

葵が女郎蜘蛛に問いかけると、急に女郎蜘蛛が苦しみながらその場に座り込む  
すると、女郎蜘蛛の体が光り、もう一つの体がゆっくり現れる。

「あなたは、凜様!・・・何故?」  
「蜘蛛やあなたは、こんな事で、その綺麗な手を汚しては、駄目で  
すよ・・・」

凜は、優しく女郎蜘蛛の手を握る。

「凜様あなたは、こんな醜い私を綺麗だと言ってくれるのですか?・  
・」

「あなたは、醜くなんて無い、だつて私のために恩返しをしてくれ  
たでしょ?」

「凜様・・・」

「本当は私、ここに出られなかつたのです。そこのいる方が私に問  
いかけて、くれたから  
出られたのです」

葵を見ると微笑んで

「まああたしが全部やった訳じゃあなideon、でも、そろそろ限界だと思づ」

葵は、凜に刀を向ける。

「貴様、何を！？」

女郎蜘蛛は、立ち上がり止めようとするが、凜がそれを阻止した。

「落ち着いて、凜さんを傷つけるつもりは、ないから・・・準備はいい？」

「お願いします。もう戻り残すことせ、あつません」「分かつた・・・ゆっくり休んで」

葵が刀を振り上げると、刀に光が集まり。

「り、凜様！」

「あらがとう、蜘蛛・・・」

凜が蜘蛛に笑いかけると、葵は、凜に向かい刀を振り下ろす。斬られた凜の体は、小さな光になつて、空に上つていった。

「凜さんは、地上に思い残す事がなくなつたから、成仏させたの」

「成仏つて、そんなことが貴様にできるのか？」

「あたしの特技の一つみた的なもんだよ

「・・・それで、凜様は、どうなつた」

「凜さんは、無事に成仏できたよ」

「そうか・・・」

「あんた、傷だらけでしょ、琥珀に治療してもうつからってきて  
は？治療するつて……」

女郎蜘蛛は、訳が分からないと首を傾げた。

「は？ってなんだよ？あんた、このままじゃ力がもどらないだろ」「そういうと、葵は、女郎蜘蛛の腕をつかみ立ち上がらせ琥珀達がいるところまで連れて行つた。

『葵様！』無事でしたか？』

「ああ、大丈夫だ、それよりこいつを治療してくれ」

葵は、女郎蜘蛛を琥珀の前に座らせた。

『・・・分かりました。少し、じつとしていてください』

琥珀は、少し考えた後、何かを察したのか素直に治療に移り  
女郎蜘蛛は、何も言わずにただ、じつとしており、それを見た葵は、  
意外そうな顔をした。

「何だ・・・その顔は？」

「いや、まさか素直に大人しくなるとは、思わなかつたから」

「別に、ただ全部吹つ切れただけだ・・・それに」

「それに？」

「貴様は、どうも人間の臭いが薄い、だから私たちの世界の奴かと思つてな」

女郎蜘蛛は、ニッとした。

それにつられ、葵も笑つた。

『治療、終わりました。これで、もう大丈夫です』

女郎蜘蛛は、立ち上がり、軽く体をほぐした。

「痛みも、もうない、礼を言つておく」

「そうか、なら良かつた」

「私は、ここに残る理由もない、自分の巣に帰ることにある、世話を  
になつた」

そう言つと、ゆっくりと、消えていった。

「これで、解決したな、あたし達も帰るか・・・」

『でも、葵、こいつらどうすんの?』

いまだ氣を失っている、幸村、佐助を指さして

『いいで、こいつらを食つか?』

朱牙は、犬歯をむき出しにして、笑つた。

「・・・いい、こいつらは城に帰す。朱牙、行ける?」

『はあ、分かった・・・』

不満そうに言つと、朱牙は、眼を閉じた。

すると、朱牙の体が虎の姿に変わつた。

しかし、ただの虎では、無く、毛並みは赤く、尻尾は一本になつて  
いた。

葵は、朱牙の背に幸村と佐助を乗せ、自分も乗つた。

琥珀は、いつもの勾玉の姿に戻った。

『行くぞ』

朱牙は、走り出した。真夜中の町には、誰も寝つており静かだった。

『着いたぞ』

城に着くと、幸村と佐助をおろし、朱牙は、元の刀の姿に戻った。

「・・・じゃあ帰るか」

「少し待つて、くれんかの？」

「つ？！」

葵が帰ろうとしたとき、後ろから声をかけられた。

「武田信玄！」

葵は、刀を抜こうとするが信玄に止められた。

「わしは、戦いに来たわけでは無い、礼をしきただけじゃ、幸村と佐助が世話をになった」

「・・・」

刀から手をおろして、信玄を睨むとそのまま自分の宿への道を進んだ。

「・・・佐助、起きているだろ？」

葵がいなくなるのを見届けると、氣絶していのはずの佐助を呼ぶ。

「あら～ばれていましたか」

すぐ立ち上がり、服についたほこりを払つた。

「大将、あの葵つて子は・・・」

「あの娘は・・・もう少し胸があればのう」

「そうですね・・・って違いますよ！..」

「分かつてある、ほんの冗談じゃ」

「しつかり、してくださいよ（この口親父は・・・）」

「あの娘は、紅原の・・・」

「じゃあ、やはり」

「よいか、佐助このことは、けして幸村に言つではないぞ」

信玄が深刻そうな顔で、佐助を見た。

「分かつてますよ、それじゃ俺は、旦那を運んでいますね」

幸村を抱え、城の中へ運んで行つた。

一人になつた信玄は、葵の進んだ道を見つめて静かに呟いた

「ついに、始まつたの・・・」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6630m/>

---

戦国乱世～あやかし物語～

2010年10月10日14時43分発行